

## カナダスキー旅行

札幌市医師会  
西村外科胃腸科

### 西村 護

この2～3年間、もうこれが最後と言いつつ、年末になると何となく出掛けていた海外スキー旅行。某スキー旅行代理店のパンフレットの旅程で、短期間と日本から近いとの理由で、カナダはウィスラーへ行くことにしました。

成田を発ち、雨煙るバンクーバーに降り立ち、チャーターバスでダウンタウンを通り抜け、スキーガイドの「バンクーバーは世界一住みよい都市で、中国系移民が20%以上を占める」との説明を受け、中国人は世界中どこでも居て、少し目立ち過ぎるなど思いつつ、湾岸沿いの道路を登り、ウィスラーの町に着きました。

われわれはコンドミニアムの滞在で、食事は出ないと覚悟していましたが、ウィスラーは五つ星のホテルでも朝食のみで、夕食が出ないところが多いとのことで、そのため到着日より夕食のレストランでの席確保のため、長蛇の列に並ぶのが一仕事となりました。

なるほど、スキーコースは広くニセコの4～5倍もあり、スキーガイドも居て、スキー滑走は十分楽しめたのですが、リフト代が馬鹿高く、シニアですら1日1人1万3千円くらいで、旧知の東京からの夫婦は2人で5日間16万円も取られたと、もうこんな所は来ないと憤懣やるかたない表情でした。

聞くとところによると、今年からアメリカ資本が入り、リフト代が2倍以上に値上がり、富裕層のみが対象で、若いスキーヤーが来たくても来られないとの由。4～5年前にバンフに来た時は、食べ物美味しく印象でしたが、今回のウィスラーの場合は、ロブスター以外は値段の割にはあまり美味しい物がないとの印象で、このままでは世界有数のスキーリゾート地としてのウィスラーも衰退の予感。

ただ、日本から近いためか、われわれのグループも日本各地から総勢32名の団体で、金婚式のため3世代で出席した家族もいました。

スキー終了時、フェアウェルパーティで、われわれ夫婦が最高齢で「その年齢で海外へスキーに出掛けられる健康の秘訣は？」など質問され、少々照れくさい気分でした。

復路バンクーバー発の便が遅れ、成田での札幌への乗り継ぎ便が遅れ、あまりついていないツアーではありました。

## 冬眠の話

札幌市医師会  
札幌田中病院

### 渡辺 祝安

わが家には、とある事情で息子より譲り受けたカメがいる。通称ミドリガメで、ミシシippiaカミミガメという。かれこれ9年目になるが、その生態に特段興味もなく飼っていた。寒くなる11月ごろから餌を食べなくなり、冬眠するのであろう。安否確認で飼っている納戸に時々見に行くのであるが、もちろんピクリともしない。しかし、決まって3月に入る頃、何事もなく冬眠から覚めてごそごそと動き出す。健康管理がいいせいなのか、とにかく丈夫で、毎年少しずつであるが大きくなっている。最近知ったのだが、冬眠中は水温5℃前後が適温であることから、まさにわが家の納戸の室温が5℃前後に保たれていたことにも驚いた。心臓血管外科医であった経験から、心臓大血管手術の補助手段として用いる超低体温法では、体外循環下に血液温を下げていくと直腸温で33℃ぐらいから心拍数が低下し、20℃前後で心室細動となるが、カメが冬眠中に体温が5℃前後に低下しても心停止に至らないことは驚異である。

調べてみると、カメに限らず冬眠する動物は低体温下で心臓障害を回避でき、心拍動を維持できるメカニズムが備わっているようだ。さらに興味深いのは、強制的に低体温にすると人間と同じく刺激伝導系の異常を示す心電図や、心筋の障害に起因する異常心電図が導出されるとのこと。このような異常心電図は、寒冷・短日環境に馴化させ冬眠を誘発したハムスターにおいても認められることから、冬眠準備期間の適応変化が、少なくとも急激な体温変化によってもたらされる障害を回避するメカニズムではないことを示している。脳室内にA1アンタゴニストを投与すると強制的低体温時も異常心電図が導出されないことから、脳内アデノシン系の活性化によってもたらされる生体反応が極度の低体温下で心拍動を維持する仕組みに関与しているものと推察されている。

冬眠のメカニズムの解明は脳障害時の低体温療法、移植臓器の保存への応用が目的だそうだが、SFに出てくる冬眠状態での宇宙旅行を夢想してしまった。